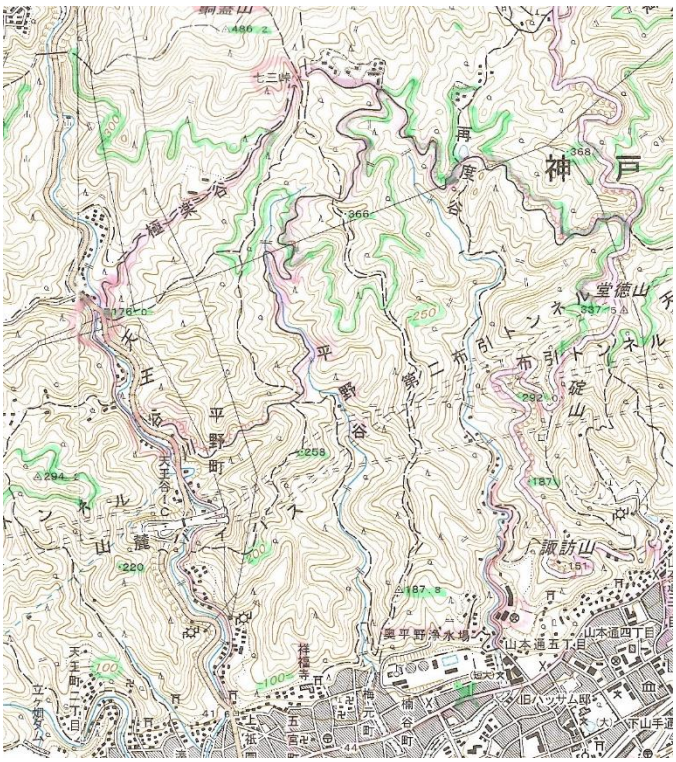
アシスト自転車、再度山ふたたびさん、そして、「敵国人」抑留所

飛田雄一（『むくげ通信』308 号、2021.9．26）

アシスト自転車を買った。サイクリング仲間に叱られるかと思ったら、貸してちょうだいなどと好意的反応があって安心した。マウンテンバイク系のものだ。

さっそく六甲山に登ってみた。いける。以前、元気なころ、普通のクロスバイクで登ったことがあるが、それに比べたら格段にラクチンだ。鼻歌まじりで登れる。下りはジェットコースターのようだ。

鶴甲団地の自宅から一分ほどで六甲ケーブル下駅。そこからＴ字が辻まで約 30 分。自力自転車のときには青息吐息で一時間以上かかっていた。二回目はそこから西へ下った。森林植物園、再度公園、そして再度山ドライブウェイ。このドライブウェイは、樹木がドライブウェイにおおいかぶさるように茂っていてとてもいい。



上部に七三峠があり、その東にある複数の建物が抑留所として使用された。有馬街道から極楽谷をとおる道路がある。七三トンネルが閉鎖されているので今は車で行くことができない。

閉鎖された七三峠トンネル。左は、閉鎖されたので登山道から行ってくださいとのこと。右が、分かりにくいが閉鎖されたトンネルの入り口。

建設局のつくった登山案内図。けっこう入りくんでいるが、分かる人には分かる？

●

このＴ字が辻からの西コース、再度山ドライブウェイに気になるところがある。二本松だ。ここから西に二本松林道がある。以前ハイキングで来たことがある。その先の七三峠にアジア・太平洋戦争時に「敵国人」抑留所があったのである。小宮まゆみさんの『敵国人抑留－戦時下の外国民間人』（2009 年、吉川弘文館）にでてくる。連合国軍捕虜等を研究する故福林徹さんは現地を訪ねてその写真も残している。

8 月某日、二本松から西へ、林道を走った。途中、ハイキングコースの大師筋にでる。猩々池（しょうじょういけ）のあるところだ。大師筋は、麓の再度筋に住んでいたころ毎週のように（ウソです）登っていた。小学校三年から高校二年まで住んでいた。母（飛田溢子）は戦前にもこのあたりに住んでいて、庭のバケツが底まで凍ったら兄（鈴木道也）と再度公園（修法が原、われわれには塩が原）までスケートに行っていたという。私の住んでいたころはそこまで凍らなかったが、一度、寒い年にほぼ凍っていて池の真ん中まで歩いていったことがある。

猩々池から更に西へ行こうとすると、鎖がかかっている。一般車両進入禁止。が、自転車はＯＫだ。更に進む。七三峠近くまできた。地図では峠まで道があることになっているが、ない。大きな仮設建造物（飛田は猩々池の北にある料理店「鯰学舎（ねんがくしゃ）」の鯰（なまず）養殖場だとみている）が道をふさいでいる感じだ。登山道があるようだが、きょうはマウンテンバイクの日なので？あきらめた。

でも二本松林道は更に西の有馬街道まで行けるように書かれている。七三峠はあきらめてそこに行くことにした。けっこうひどい道だ。車なら四輪駆動の小型車でないと無理だろう。わがアシスト自転車は、マウンテンバイク系、なんとか下った。途中押して歩いたこころも何カ所かあったが。

有馬街道にでた。大きな車がびゅんびゅん走っている。怖いが、幸い旧道が並行して残っていたのでそこを下った。そして、なつかしい祇園神社にでた。私は生まれてから再度筋

に引っ越しするまで祇園神社の西、都由乃町に住んでいた。この神社の夏祭りは大きなもので、毎年でかけていた。祇園祭りといえば、この神社の祭りだと思っていた。私はあるとき、京都の話を聞いて、「京都にも祇園祭りがあるの」といって笑われた。

●

神戸の祇園神社から鶴甲団地の自宅まで帰った。阪急六甲から自宅は急坂で、普通の自転車なら登る気がしないが、アシスト自転車ならＯＫだ。

数日後、七三峠にリベンジした。地図には有馬街道から七三峠に登るもうひとつの道路がある。極楽谷の道だ。

こんどは六甲山経由ではなくて、普通に自宅から西へ走り、有馬街道を登って、その入り口を探した。あった。でも、七三峠の表示はなく、「社会福祉法人基督教日本救霊隊 神戸実業学院 KJG、この先 800M」という看板だけがある。行くしかない。行った。建物の入り口に「社会福祉法人 神戸実業学院 八代斌助」という看板があった。八代斌助（1900～1970）はキリスト教界では有名人だ。

右が、有馬街道にある看板。左は、その学院まで行ったとき、入口にあった掲示。

駐車場には車が何台かとまっている。たまたまでてこられた女性が、不審なサイクリストがいる？と、声をかけてきた。怪しいものではないと説明するが通じたかどうか。

この先の七三峠周辺に福祉施設があってそこに行きたいのだといった。すると教えてくれた。

この道を進んでいくと今は閉鎖されているトンネルがある。トンネルの向うには以前社会福祉施設があった。今は移転してそこにはないとのことだった。

しかし、行けるとこまで行かねばと、更に登って行った。道は、すでに使われておらず落ち葉がつもって走りにくい。着いた。閉鎖されたトンネルの入り口があった。七三トンネルが閉鎖されていることはハイキングガイドで調べていた。そのトンネルを捲くように登山道があるが、今回は断念した。

帰路、おそるおそる落ち葉のつもる急な道をくだって、祇園神社、そして家に帰った。猛暑のなか、われながらよくやる。

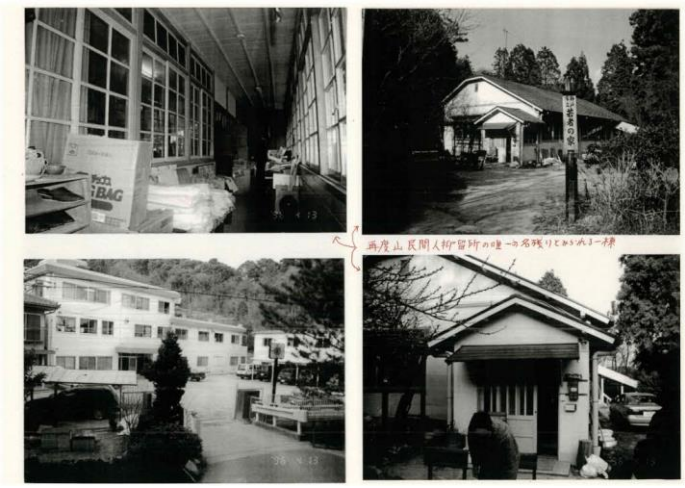
●

福林徹さんの資料。

福林徹さんからいただいていた資料では、「社会福祉法人くすのき会 知的障害者厚生施設 ひふみ園」と「神戸市青少年会館 若者の家」に敵国人抑留所があったとのこと。そのパンフレットのコピーもあった。電話をした。その電話は使われていなかったが、なんとか電話をした。神戸市青少年会館のかたが、若者の家のことを教えてくれた。（住所は、ひふみ園が神戸市中央区神戸港地方口一里山一の一五〇。若者の家が同一の一三二）

七三トンネルが閉鎖されるときに若者の家も閉鎖した。建物はとりこわされ、今は森にかえっているのでははいか。となりのひふみ園もそのときに閉鎖となって別のところに移転した。（福林メモにある）「榎原ちかし」さんは、若者の家の管理人さんだと思われるが亡くなられた。

福林さんの資料にもう一枚の写真がある。そこに先の写真３枚に加えて、「若者の家」の看板の写っているものがある。そしてそこには、「再度山民間人抑留所の唯一の名残りとみられる一棟」とある。右上の若者の家の写真は福林さん撮影のものではないようだが、残りの写真には、1996 年 4 月 13 日と日付が入っている。その時期に福林さんが現地調査をされていたということだ。頭が下がる。



これも、福林徹さんの資料

おかげでだいたいの事情が分かった。二万五千分の一の地図（2005 年 3 月）には、七三峠の東に建物がいくつかあ

るが、それらがひふみ園と若者の家であったようだ。今度は、ハイキングでその森になった？ところにいかなかればならない。

●

家でも調査が続いていた。ネットで七三峠をしらべたらマウンテンバイクの達人が何回か登っている。

「f/k/a 北摂ひっそり」さんのブログ「路面と勾配／自転車でいくマイナーロード」に、「廃トンネルと七三峠」（2014/05/07）があった。丁寧な解説と写真が参考になる。
http://nekotani.blog.fc2.com/blog-entry-332.html

氏は、私と同じように有馬街道から極楽坂を登り、閉鎖されたトンネルまで行っている。後日、「二本松林道とオマケ」（2016/01/03）を書いている。
http://nekotani.blog.fc2.com/blog-entry-1007.html

それによると、私が鯰の養殖場ではないかと推測したところにくすのき会の看板をみつけている。私が行ったときにその看板が撤去されていた。

明らかにそのゲートの奥に抑留所として利用された施設があったのである。また、ネットで別の「廃墟」調査グループのサイト
https://haikyo.info/s/8695.html に以下の記述がある。
「七三峠のトンネル（若者の家）／住所 兵庫県神戸市兵庫区平野町／種類 廃道 兵庫県の廃道／現況 現存／状態 七三峠のトンネル（若者の家）／概要・歴史 七三峠のトンネルは兵庫県神戸市にある廃隧道。中央区、兵庫区、北区の境にある極楽林道・七三峠に位置する。この奥には神戸市立「若者の家」と入所更生施設「ひふみ園」があったが、2006年頃に解体されたらしい。大正年間には知的障害の子ども達の施設「竹馬学園」があり、戦時中には「兵庫抑留所」として利用されていたという。心霊スポットとも言われる。」

いやいやいろんなマニアがおられるが、そのおかげで情報を得ることができて感謝している。ハイキングのサイト Yama Roco にも七三峠の紹介があるが、そこでは、七三峠(ひちさんとうげ)という読みがかいてある。「ななさん」だと思っていたが、「ひちさん」が正しいのか？　いや、？？？が、いろいろでてくる。

これらのネット情報をもとに、再度現地調査をしなければならない。でも、暑い日が続いた。

●

以上の情報を、私も会員の POW 研究会のメーリングリストに投稿した。POW は、Prisoner of War、戦争捕虜のことだ。すぐに返信があった。

ひとりは、田村恵子さん。『戦争花嫁―国境を越えた女たちの半世紀』（共著、芙蓉書房出版、2002）を書かれたかただ。

「私はずいぶん前になりますが、福林さんにだいたいの見当を教えていただき、車で有馬街道から横道に入り、現地を訪問しました。／有馬街道沿いにあった福祉施設で道を尋ね、横道を進むと車が通れなくなり、小高い丘を徒歩で越えると抑留所跡に出ました。当時の建物はなくなっており、福祉施設として使用されていた建物が残っていました。でも誰かが時々訪れているような雰囲気だったように記憶しています。／飛田さんが書かれたトンネルはやはり閉鎖されていたので、どこへ通じるかはわからなかったのですが、敷地の浜側にあり、おそらくそのトンネルを使って抑留者が時々神戸市街まで下りて行ったのだろうと想像しました。／山の中で、外界から隔絶された雰囲気だったのをよく覚えています。地元神戸に住む知人二人に連れて行ってもらったのですが、地元の人も全く知らない場所でした。抑留所があっただけではなく、戦後は福祉施設がそこにあったと知り、障害がある子供たちを世間の目から遠ざけて世話をする、あるいは世話をせざるをえなかったことに、複雑な気持ちを持ちました。／今でさえ不便な場所ですが、戦争中はさらに行くのが大変な場所だったのです。しかしスイス領事館の担当者は抑留所を頻繁に訪問して詳しい報告書を残しています。」

そのスイス領事の報告書も送っていただくことにした。届いたら久しぶりに英語の勉強をしようと思う。

図7　再度山の抑留所（終戦直後撮影，『Trapped with the Enemy』より）
1944年5月以降，神戸抑留所とされた．
小宮まゆみ『敵国人抑留－戦時下の外国民間人』200頁より。

あとおひとり、『敵国人抑留－戦時下の外国民間人』を書かれた小宮まゆみさんからも返信をいただいた。

「再度山の抑留所について、色々興味深い情報をありがとうございました。／私もずいぶん前に福林さんに案内してもらい、現地を訪れたことがあります。／探してみたら写真のデータが残っていました。2007年8月4日だったようです。田村さんのおっしゃるように、抑留所だった木造の建物はすでに無くなり、社会福祉法人くすのき会の知的障害者施設ひふみ園と、神戸市青少年会館若者の家の建物が残っていました。しかしもう使われていないようでした。木の柵で閉鎖された小さなトンネルがあったので、それが現在では幽霊の出る心霊スポットと言われているのでしょう。／飛田さんの紹介して下さった「廃トンネルと七三峠」などのネット記事を読むと、途中の道がかなり荒れているようなので、車でも徒歩でも行くのは難しく、それこそマウンテン

バイクで行くしかないような所になってしまったようですね。(2007 年当時は車で行けました)／飛田さん、今度アシスト付きマウンテンバイクで現地を訪れたら、建物を撤去して森になってしまったという現地の写真を１枚ください。」

やはり、森となった？抑留所に行かなくてはならない。

●

B29 の機体より作ったしゃもじと玉置昭爾さん

さて、今年の 3 月 17 日の神戸空襲を記録する会慰霊祭（神戸市兵庫区・薬仙寺）でのことである。堺市から玉置昭爾さん (91 歳) が参加された。しゃもじを持ってこられて、記録する会に寄付してくださった。それは、1945 年 3 月 17 日の神戸大空襲のときに緒方醇一大尉が B29 に体当たりして撃墜された機体（後述）の破片から作ったもので、抑留されていた白人の外国人からもらったものだという。玉置さんのお話は以下のとおり。

抑留所で監視にあたっていた警察官のおじさん（広田義男、玉置さんの母の弟、）に大豆を届けにいった。おじさんは戦後すぐに交通事故で死亡した。30 過ぎぐらいで子供がいた。その後、親戚付き合いはしていない。元町か三宮あたりから歩いて登った。行ったときには、外国人も普通の服装だった。初めてベッドをみてびっくりした。その晩そのベッドに初めて寝かせてもらった、皿にスプーンでおかゆのようなものをたべた。みんな同じものだった。(神戸空襲を記録する会事務局長、小城智子さんより)

三宮か元町から歩いて登ったということは、一般的な登山道である大師筋からだったと思う。帰りは、使われていた七三峠トンネルを車でおくってもらったかもしれない。

●

神戸新聞の「戦後６０年特集・記憶を託す」4 に宮沢之祐記者（当時）が「Ｂ２９撃墜、その後－落ちてきた米兵」(2005/11/15) を書いている。そのじゃもじの「原料」となった？B29 の話である。

「井上仁性（じんしよう）さん（８６）にとってチョコレートは、六十年前の記憶の箱を開けるかぎになる。／神戸・再度山の山腹にある大龍寺の住職。一九四五年三月十七日早朝、緒方醇一（じゆんいち）大尉の戦闘機とともに墜落したＢ２９爆撃機を、憲兵よりも先に発見した。／場所は現在の再度公園で、修法ヶ原（しおがはら）池の西岸。大破した機内の座席や近くの松の枝上で米兵が死んでいた。「皆、かわいい顔の少年兵。憎いとは思えんかった」／チョコレートやあめが大量に散らばっていた。拾った缶やポケットに、ありったけ入れた。甘い物がない時代、“戦果”を高齢の父母が喜んだ。落ちていた温かそうなブーツ一足も拝借した。／井上さんの記憶では、遺体の米兵は七、八人。生き残った米兵がいたと伝え聞いたが、詳しいことは分からなかった。／Ｂ２９の撃墜は当時の新聞も報じた。遺体は十九日になっても山中に放置されていた。二十日付の神戸新聞は「見たり體當（たいあた）りの尊き戦果」との見出しを付けた。／十七日の無差別爆撃は、一晩で神戸市西部を焼き払い、二千七百人ともいわれる市民を殺した。憎悪は死者をも報復の対象にした。記事には〈敵死骸（しがい）に向かって痰（たん）をかけ脚で蹴り上げてゐる中学生二人の姿こそ港都市民の激怒を表徴してゐた〉とある。／米兵については〈撃墜されるや直ちに落下傘で降下せんとする卑怯（ひきよう）な彼等（かれら）である〉としたが、生存兵には触れていない。／生存兵、つまり、捕虜の存在は軍の機密事項だった。報道どころか口外さえ禁じられたという。／終戦を迎えて、いっそう話せなくなった。連合国軍総司令部（ＧＨＱ）が戦犯捜査を開始、暴力に加わった者の処刑がうわさされた。井上さんは、チョコレートやブーツの持ち去りを罪に問われないか怖くなった。ブーツは妻の実家のある県西部に隠したという。／撃墜されたＢ２９の乗員はどうなったのだろう。／私たちは、「ＰＯＷ（戦争捕虜）研究会」の共同代表で、高校教員の福林徹さん（５７）＝京都府＝を訪ねた。／この十年、東京の国会図書館などでＧＨＱの資料を集め、分析した。元憲兵や、刑務所で米兵捕虜と同室だった日本人の供述書もある。「裏付けとなる証言も集め、地域の戦争史を明らかにしたい」と福林さん。井上さんからも聞き取り調査をした。／再度山に落ちた米兵の、その後―。調査によると、乗員は十一人だった。墜落時に九人が死亡。落下傘で脱出したロバート・ネルソン少尉とアルジー・オーガナス軍曹が生き残った。／二人は山中で警官らに捕まり、中部憲兵隊司令部（大阪市）へ移送。取り調べ後は大阪陸軍刑務所に収容されていた。」(この記事に、「修法ヶ原（しおがはら）池」とある。私ら神戸人は、「しおがはら」といっており、地図にも「塩が原」というのもあった。「修法」を「しお」と読むのが神戸弁なのか？)

●

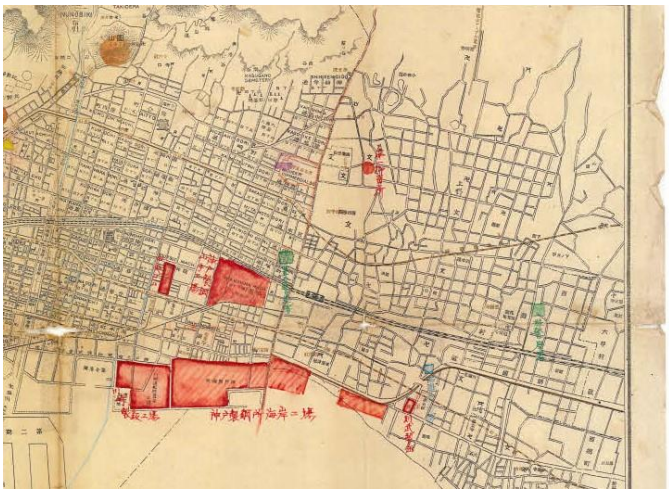
民間人抑留所について、もうひとつ興味深い話がある。2002 年 6 月 13 日、「神戸港における戦時下朝鮮人・中国人強制連行を調査する会」(代表・安井三吉) が連合国軍捕虜の勉強会を開いた。テーマは、「神戸港強制連行と連合国軍捕虜」、講師は福林徹さんだ。この勉強会に明石在住の松本充司さん（1927 年 8 月 5 日大阪生まれ、当時 85 歳）が来られた。松本さんは、1945 年、神戸警備隊中部 6 部隊に所属していて、連合国軍捕虜監視の責任者だったという。神戸市内の民間人抑留所も担当していて青谷の抑留所などをま

わったが、そこにいた人々が空襲のときにどうなったのだろうかとその後も気になっていたとのことだ。新聞で集会のことを知って参加されたのだ。

調査する会の溝田彰さんが 2002 年 7 月 12 日、松本さんのご自宅で聞き取りをした記録が残っている。その記録に民間人抑留所については、次のようにある。

一般の外国籍の民間人は第 1 から第 4 までの抑留所に収容していた。人数と国籍は確認しに廻ったがあと、食事の事とかは管轄外であった。青谷の乗馬クラブの隣の大きな家が一般の第 1 抑留所だった。そこには 2 回兵隊と巡回した。抑留所への坂は当時からアスファルト舗装してあり、裏に鋲が打っている軍靴は滑るので兵隊が巡回するのに困った。人員書（名簿）は申し送りで次に渡した。地図はボロボロだったのでその時に作りなおして新しいの方を渡し、古い方は捨てるつもりで手元に置いていた。

その「地図」を後日もってきてくださった。松本さんは几帳面なかたで、詳細に軍歴も記録され、地図も廃棄すべきものを残していたのである。A3、4 枚分の大きなもので、大正時代のローマ字入りの神戸市内の白地図に神戸警備隊、軍需施設工場、食料集積所などを書き込んだもので、4 か所の民間人抑留所の場所も記載されている。（神戸港調査する会の HP に貼り付けたのでごらんください。コピー版配布も可能です。以下はその一部、青谷の抑留所ほか。私は結婚後数年、その第一抑留所のすぐ北の城の下通に住んでいた。青谷の乗馬クラブは、私がそこに住んでいるころ、神戸市西区に移転した。神戸市関連の裏金が動いたという噂があった・・・。）



松本充司さん提供の地図の一部

●

松本さんの地図にある 4 か所の抑留所は、前掲小宮まゆみさんの本によると次のとおりである。（地名は当時のもの）

1）神戸市灘区　カナダ学院
2）神戸市神戸区　イースタンロッジ
3）神戸市神戸区　バターフィールドアンドスワイヤ
4）神戸市神戸区　シーメンスミッション

以下、小宮さんの本のなかで神戸関係のものをピックアップして紹介する。

抑留初期に、「兵庫県では開戦時に民間人の抑留だけでなく、スパイ容疑で警察と憲兵隊に計 27 名の外国人がいっせいに検挙拘留された」という。

1944 年 5 月 23～26 日、第 1、3、4 抑留所が再度山に移転した。第 2 抑留所に抑留されていた小林聖心女子学院（宝塚）の修道女 17 名ら計 40 名は、同年 7 月長崎抑留所へ移動させて閉鎖した。

再度山抑留所について、パンアメリカン航空の社員は、「われわれはごみごみした街を出て、山中の安全な場所に移動することになった。木立の茂る丘に囲まれ、あたりは大変静かで空気は新鮮、プライバシーがあり、そして何よりもとても美しいところだった」と回想している。

「終戦時の敵国人抑留所（1945 年 1 月～8 月）」の一覧表には、21 か所、計 858 名、死亡者数 50 名とある。兵庫県は、「神戸市葺合区再度山　養護学校竹馬学園、163 名／主な抑留者、グアム島アメリカ人・在日英米人／死亡者 12 名」

そして敗戦後、「神戸の再度山に抑留されていたグアム島のアメリカ人のところには、9 月 8 日、米軍の救出部隊がやってきた。荷物をまとめてその日の夜行列車で横浜に移動し、翌日には厚木飛行場から沖縄経由でマニラに飛び、9 月 24 日、ハワイホノルルに到着した。」

●

そして、いよいよ、森となった再度山抑留所を訪ねるべくアシスト自転車に乗った。9 月 20 日のことだ。快調に六甲山越えで二本松林道に入り、七三峠直下まできた。後は徒歩での少しの登りだ。先に紹介した鯰の養殖場だと私が考えたところの東側の細い登山道だ。けっこう歩いたがそれらしいところにたどり着かなかった。また道を間違えたのだ。後にスマホの「Yamap」（飛田愛用のお勧め登山マップ）の位置情報をみると、養殖場の西側の登山道を登らなければいけなかったのだ。そのため、この文章の最後を飾るはずの「森に帰った抑留所跡」の写真は、ない。そのかわり、帰路、再度山ドライブウェイにある防空壕跡の写真をとってきた。前々から気になっていたところだ。そのうち、この防空壕のレポートも書きたいと思っている。（※道を間違えたおかげで？、養殖場の全貌を登山道からみた。養殖場ではなく椎茸の栽培場でした。まちがいの多いレポートでした。）

再度山ドライブウェイ沿いにある防空壕跡。